

古ノヴゴロド方言における 男性名詞単数主格語尾-e の起源について

大山 祐 亮

はじめに

古ノヴゴロド方言は11世紀から15世紀にかけてノヴゴロド周辺で用いられていた古ロシア語の一方言である。「方言」と伝統的に呼称されているにもかかわらず、この「方言」はロシア語や古教会スラヴ語（以下 OCS）など他の「言語」と並んで重要視されている。というのは、o-stem 男性名詞単数主格の語尾-e や、*ТыГ > ТыГГ という充音、そして ъ と o ならびに ъ と e の表記上の大規模な混同など、他のスラヴ語にはみられない特徴が複数存在すると考えられているからである。特に男性名詞の単数主格語尾-e は、スラヴ語学のみならず、印欧語学の視点からも大きな関心を集めている。本稿では、この-e という語尾にどのような位置づけを与えるべきかという問題を、先行研究の説明方法の比較を中心にして検討していく。

古ノヴゴロド方言についてのこれまでの研究は、他のスラヴ語に比べると数が少ない。文法書としては Зализняк のものがほぼ唯一のものであり、¹ 古ノヴゴロド方言の研究にはこの書籍が必要不可欠であるといえる。印欧語学的な視点からの考察は Olander や、² Vermeer らによるものが存在する。³

また、古ノヴゴロド方言の内部にも年代による分類が存在する。本稿では Зализняк に倣い、A 期（～1125 年ごろ）、B 期（1125 年～1220 年ごろ）、B 期（1220 年～1290 年ごろ）、Г 期（14 世紀）、Д 期（15 世紀）という分類を用いる。とりわけ A 期の文献は、イェルの表記が「強い位置」および「弱い位置」の双方においてきわめて正確であり、Зализняк の述べているように、⁴ イェルの消滅に先立つ時期のものであらうと思われる。

古ノヴゴロド方言に特有の-e という男性名詞単数主格語尾がみられるのは、最も典型的

¹ Зализняк А.А. Древненовгородский диалект. 2-е изд. М., 2004.

² Olander Thomas, *Proto-Slavic inflectional morphology: a comparative handbook* (Leiden: Brill, 2015).

³ Vermeer Willem, “The mysterious North Russian nominative singular ending -e and the problem of the reflex of Proto-Indo-European *-os in Slavic,” *Die Welt der Slaven*. 36, no. 1-2 (1991), pp. 271-295; Vermeer Willem, “On explaining why the Early North Russian nominative singular in -e does not palatalize stem-final velars,” *Russian Linguistics*. 18, no 2. (1994), pp.145-157.

⁴ Зализняк. Древненовгородский диалект. С. 58-59.

には o-stem の男性名詞 (e.g. брате⁵ = OCS братъ) であり, 次いで硬変化の形容詞や 1 分詞 (e.g. которей⁶ = OCS которыи), さらに通常-ко という語尾をもつような男性の固有名詞 (e.g. Иваноке⁷ = Иванко) である。逆に, u-stem の名詞, 数詞 единь, そして OCS で (男性) 単数主格に-ь という語尾が現れるような代名詞は, самѣ⁸ (= OCS самъ) を除き, すべてが-e ではなく-ь という男性単数主格語尾をとる。また, o-stem の男性名詞についても, 単数対格においては-e ではなく必ず-ь という語尾が用いられる。

ただし, 専ら-e をとる形態的カテゴリーにおいても, 他のスラヴ語と同じ-ь という男性単数主格語尾が用いられる場合はある。⁹ Зализняк や Иванов らは, この二種類の語尾の関係を民衆文献と非民衆文献という文献の性質の二つの区分と結びつけ, -e という男性単数主格語尾は民衆文献, -ь という男性単数主格語尾は非民衆文献で用いられるものであると述べている。¹⁰ しかし, 前述のように, 代名詞についてはその限りではないことから, 両者が何らかの別の基準によって使い分けられている可能性も考慮するべきであるように思われる。

1. 印欧祖語*-os 由来説

近年論じられている印欧祖語をベースにした-e という男性単数主格語尾の由来の説明の主要なものは, Olander の採用したような,¹¹ 印欧祖語*-os の反映形として*-ə のような中間段階を想定し, そこから古ノヴゴロド方言の-e と, 他のスラヴ語の-ь が分化したとするものである。この主張を最初に行なったのは Иванов であり,¹² 他の研究者では Зализняк や Хабургаев も, 印欧祖語の*-os が何らかの音変化を経たものであるという立場をとっている。¹³

⁵ Янин В.Л., Зализняк А.А. Новгородские грамоты на бересте (из раскопок 1977-1983 гг.). Комментарии и словоуказатель к берестяным грамотам (из раскопок 1951-1983 гг.). М., 1986. С. 39.

⁶ Янин В.Л., Зализняк А.А. Новгородские грамоты на бересте (из раскопок 1990-1996 гг.). Палеография берестяных грамот и их внестратиграфическое датирование. М., 2000. С. 26-27.

⁷ Янин В.Л., Зализняк А.А. Новгородские грамоты на бересте (из раскопок 1984-1989 гг.). М., 1993. С. 113.

⁸ Арциховский А.В. Новгородские грамоты на бересте (из раскопок 1952 г.). М., 1954. С. 18-20.

⁹ 詳細は付録を参照せよ。

¹⁰ Древнерусская грамматика XII-XIII вв. М., 1995. С. 172; Зализняк. Древненовгородский диалект. С. 100.

¹¹ Olander, *Proto-Slavic inflectional morphology*, pp. 103-104.

¹² Иванов В.В. Отражение индоевропейского casus indefinitus в древненовгородском диалекте // *Russian Linguistics*. 9. 1985, № 2-3. С. 327-334.

¹³ Зализняк А.А. Новгородские берестяные грамоты и проблемы диалектного членения позднего праславянского языка // *Славянское языкознание. X Международный съезд славистов. Доклады советской делегации*. М., 1988. С. 170; Хабургаев Г.А. Очерки исторической морфологии русского языка (Имена). М., 1990. С. 56.

このような説明方法を採用する利点は、この-e という男性単数主格語尾の由来を、他の語尾からの類推を利用せずに説明できることである。*-os > -e という変化が実際に起こっているならば、まず、сынъ に代表される u-stem 男性名詞にこの-e という主格語尾がみられないことの理由が容易に説明できる。さらに、Зализняк が述べているように、¹⁴ この変化の相対年代を第一次口蓋化よりも前とすることで、語幹末の軟口蓋音が口蓋化を示さないこともまた説明可能となる。*-os > *-ə という中間段階を仮定した場合も同様であり、第一次口蓋化の起こった時点ではまだ*-ə という段階にとどまっていたとすることで、口蓋化の問題を矛盾なく説明することができる。したがって、説明の経済性という観点からみれば、この説明方法が最も優れているといえる。

しかしながら、この説明方法には問題点も存在する。その問題点は、o-stem 男性名詞単数主格以外の形態素に*-os > -e という音変化を示さない反例が存在するという点と、古ノヴゴロド方言の独自の革新であるこの音変化に相対年代上後続するスラヴ語の共通革新が存在するという点の二つに大別される。

まず、前者についてであるが、最も大きな問題となるのは слово¹⁵ (< 印欧祖語 *kle/ouos. cf. 古典ギリシア語 κλέος 「名誉」) のような s-stem 中性名詞の単数主・対格語尾と, тамо¹⁶ (< 印欧祖語 *tāmos. cf. 古典ギリシア語 τῆμος 「それから」) のような副詞である。これらの語はどれも印欧祖語の時点で*-os という語尾が再建されているが、古ノヴゴロド方言においては、*-os > -e という仮定から得られるはずの-e という語尾ではなく、他のスラヴ語と同じ-o という語尾がみられる。Vermeer は、さらに Sadko や Miloš といった人名をも *-os > *-ə という変化に対する反例として挙げている。¹⁷ このうち、とりわけ тамо のような副詞は、他の形態からの類推が起こり得ない語であるため、-e ではなく-o という語尾が現れる理由を説明することができない。

次に、後者の問題について考察する。まず、Olander の主張するように、*-os > *-ə という音変化が起こった後に、古ノヴゴロド方言では*-ə > -e、それ以外の全てのスラヴ語では*-ə > -ь という変化が起こったと仮定する。*-ə > -ь という音変化は、口蓋化のように通言語的にしばしばみられる音変化ではないことから、それぞれの言語で独自に起こった変化であるとするよりは、むしろ共通革新とみなすのが妥当であるといえる。つまり、古ノヴゴロド方言は共通スラヴ語から単独で分化しているということになる。したがって、言語分化の相対年代は、まず古ノヴゴロド方言が共通スラヴ語から分化し、それから共通スラ

¹⁴ Зализняк. Древненовгородский диалект. С. 149.

¹⁵ 用例は白樺文書 531 など：Арциховский А.В., Янин В.Л. Новгородские грамоты на бересте (из раскопок 1962–1976 гг.). М., 1978. С. 130–134; Зализняк. Древненовгородский диалект. С. 416–420.

¹⁶ 用例は白樺文書 227 など：Арциховский А.В., Борковский В.И. Новгородские грамоты на бересте (из раскопок 1956–1957 гг.). М., 1963. С. 48–51; Зализняк. Древненовгородский диалект. С. 375–377.

¹⁷ Vermeer, “The mysterious North Russian,” pp. 280–281.

ヴ語が崩壊して東スラヴ語が分化する、というものとなる。すなわち、古ノヴゴロド方言は、言語系統的に東スラヴ語ではありえないということとなる。

しかしながら、古ノヴゴロド方言には、明らかに東スラヴ語的な特徴が存在する。例えば、共通スラヴ語における語末の鼻母音* ę が -(j)a と脱鼻音化することや (e.g. 共通スラヴ語* jьmę > 古ノヴゴロド方言 *имя*¹⁸), 強い位置における* ь が o へと変化することは (e.g. 共通スラヴ語* гьзь > 古ノヴゴロド方言 *рожь*¹⁹), 本来東スラヴ語のみにみられるものである。²⁰

このように、* -os > -e という音変化を仮定すると、共通スラヴ語から古ノヴゴロド方言が分化した時期が東スラヴ語の分化よりも以前のものになってしまうため、古ノヴゴロド方言のもつ東スラヴ語的要素が説明できなくなる。

以上のように考えると、 -e という男性単数主格語尾を印欧祖語の* -os の直接の反映系であるとする仮説は、説明の経済性という利点は存在するものの、かえって説明できなくなる事象が複数存在するため、現時点では説得力に欠けるものと見なさざるを得ない。

この説明方法に説得力を持たせるためには、まず第一に、Olanderの仮定した* ə という音が存在したという証拠を実際の文献上で発見することが不可欠となるだろう。それに加えて、古ノヴゴロド方言がスラヴ語の系統樹においてどのような位置を占めるのかという問題についても、詳細な考察を行う必要があるといえる。

2. 印欧祖語* -ios 由来説

印欧祖語由来説のもう一つのアプローチとしては、Vermeerの iō-stem 由来説が挙げられる。Vermeerは、Olanderと同じく男性単数主格語尾 -e の由来を印欧祖語に求める説明方法をとっているが、起源となる形態素を o-stem 男性名詞の* -os という語尾ではなく、その軟変化である iō-stem 男性名詞の単数主格語尾である* -ios であると主張している。²¹同様の説を支持している研究者にはСоколянскийやКрыськоがいる。²²

Vermeerは、この* -ios が o-stem の単数主格語尾となったのは、* -o という語尾が o-stem

¹⁸ 用例は白樺文書 23 など : *Арциховский и др.* Новгородские грамоты 1952 г. С. 24-25; *Зализняк.* Древненовгородский диалект. С. 470.

¹⁹ 用例は白樺文書 42 など : Там же. *Арциховский и др.* Новгородские грамоты 1952 г. С. 42-43; *Зализняк.* Древненовгородский диалект. С. 619.

²⁰ 散発的ながら、語中における* ę > (j)a という変化はチェコ語にもみられる (e.g. 共通スラヴ語* językь 「言葉」 > チェコ語 *jazyk*).

²¹ 前注 3 参照。

²² *Соколянский А.А.* Откуда есть пошел новгородский хлѣбе: (Историко-морфологический этюд) // *Берестяные грамоты: 50 лет открытия и изучения / Под ред. В.Л. Янина. М., 2003. С. 269-278; Соколянский А.А.* Введение в славянскую филологию. М., 2004. С. 190-196; *Крысько В.Б.* Очерки по истории русского языка. М., 2007. С. 83-114.

中性名詞と同じものとなってしまうのを避けるための形態的な要求と、主格と呼格の区別が存在しないフィン系の基層言語の影響によるものであると述べている。²³ すなわち、この問題を解決するために他の全ての共通スラヴ語の方言が u-stem 男性名詞の*-ь という語尾を採用し、o-stem 男性名詞に拡張したのに対して、古ノヴゴロド方言のもととなった共通スラヴ語北方言は jo-stem 男性名詞の主格語尾*-e を採用したため、²⁴ 結果的に-e という呼格と同形の男性単数主格語尾が誕生したのだと主張しているのである。

このように仮定すると、jo-stem 男性名詞にも-e という単数主格語尾が現れるはずである。これについては、古ノヴゴロド方言の分化後に他のスラヴ語との接触が起こったため、その結果として他の方言と同じ-ь へと変化してしまったのだと説明している。

このような説明に加えて、Vermeer は、語幹末の軟口蓋音が口蓋化を示さない理由を、第二次口蓋化が存在しないことに求めている。²⁵ すなわち、第二次口蓋化が存在しないことによって、単数呼格以外の形態における語幹末子音の交替は起こらなくなるという事実と、брате「兄弟」のような軟口蓋以外の語幹末子音をもつ名詞が全て交替を示さないという事実から、語幹末の子音をパラダイム全体で単一のものにしようとする類推がはたらき、その結果として*-e の直前の口蓋化子音が他の格と同じ軟口蓋音へと平準化されてしまったのであると説明しているのである。このように、Vermeer の説明方法は、-e という主格語尾の起源を印欧祖語に求めているという点では Olander らと共通しているが、その細部は大きく異なるものであるといえる。

この説明方法の利点は、語幹末子音に口蓋化が起こらないこと理由を、一貫性をもつ論理によって説明できるということである。また、口蓋化が起こらないという現象に対するこの説明は、-e という主格語尾の由来を説明する際に Vermeer が立てた仮説に依拠するものではないため、他の説明方法をとった際にも用いることができるように思われる。

しかしながら、Vermeer の説明方法にも、やはり問題点が存在する。

その問題点は、仮定上 o-stem 男性名詞に現れる*-o が別の語尾に置換される動機は、これが中性名詞と同じ語尾であることだという主張に存在する。というのは、別の活用語幹と主格語尾が同形になってしまうことを回避するという動機は、実際には共通スラヴ語には存在していないように思われるからである。例えば、o-stem 中性名詞 (e.g. *jьgo 「くびき」) と s-stem 中性名詞 (e.g. *nebo 「空」)、i-stem 男性名詞 (e.g. *pоtь 「道」) と i-stem 女性名詞 (e.g. *zizнь 「命」)、n-stem 中性名詞 (e.g. *jьmę 「名」) と nt-stem 中性名詞 (e.g.

²³ Vermeer, "On explaining," (前注3参照) pp. 147-149.

²⁴ Vermeer は、o-stem 男性名詞主格語尾に-e を用いる方言が共通スラヴ語の北方言に由来するものであるという定義をしている。Соколянскій はさらに具体的に、それをクリヴィチ人と結びつけることができると主張している：Vermeer, "On explaining," p. 155; Соколянскій. Введение. С. 193-195.

²⁵ Vermeer, "On explaining," p. 151.

*otročę「子供」), n-stem 男性名詞 (e.g. *kamy「石」) と ū-stem 女性名詞 (e.g. *ljuby「愛」) のように、共通スラヴ語には主格語尾が共通する活用語幹の組が複数存在する。

さらに、スラヴ語の先史時代には、印欧祖語期の語幹強勢の中性名詞が実際に男性名詞に合流していることから (e.g. 印欧祖語の中性名詞*d^huórom > 共通スラヴ語の男性名詞*dvorъ「中庭」), 男性名詞と中性名詞の区別を保とうとする形態論的な動機もまた存在していなかったということが、Илич-Свитыч によって示されている。²⁶

したがって、Vermeer の主張したような、主格語尾と呼格語尾を同形にしようとするフィン系の基層言語の影響がはたらく状況がもし存在していたならば、主格語尾*-o を別の語尾に置換するのではなく、むしろより無標な主格語尾*-o を呼格語尾へと拡張し、単数形を完全に中性名詞と合流させる方向へと変化する可能性のほうが高いように思われる。

以上のように考えると、Vermeer の説は、主張の根幹をなす類推モデルに大きな問題点があるように思われる。さらに、代名詞や屈折語尾のような借用の影響を受けにくい形態素における問題をすべて他のスラヴ語との接触の結果であると説明することにも疑問の余地が残る。したがって、Olander の説と同様に、古ノヴゴロド方言の東スラヴ語的要素の由来の説明にいかにも強い説得力をもたせるかということも、なお課題として残されているように思われる。

しかしながら、Vermeer の提示した口蓋化が起こらない現象の説明は、大きな価値をもつといえる。Vermeer の主張した主格語尾-e の由来を支持せず、他の説明方法をとったとしても、この部分の論理については、援用することが可能である。

3. 呼格語尾-e 由来説

冒頭で述べたとおり、呼格由来説は Соболевский に端を発する、主格語尾-e の由来を同じ o-stem 男性名詞の呼格語尾からの類推ないし拡張であるとする説である。²⁷ 呼格語尾を主格語尾に拡張したという説明方法であるため、呼格と主格の区別を解消する変化が起こったと主張している点では Vermeer の説と重なっている。Шахматов も、主格が呼格として用いられるようになったことをきっかけとみなし、この説を支持している。²⁸

この説明方法の最も大きな利点は、文献上にみられない假定上の音変化の利用を必要としないところである。さらに、古ノヴゴロド方言の系統上の位置づけを東スラヴ語の一変種であるとするところができるため、男性単数主格語尾-e を印欧祖語由来とする説の抱えている最も大きな問題点が生じないということも、相対的な利点として挙げられる。

²⁶ Илич-Свитыч В.М. Именная акцентология в балтийском и славянском. М., 1963. С. 120-140.

²⁷ Соболевский А.И. Лекции по истории русского языка. М., 1888. С. 136-138.

²⁸ Шахматов А.А. Историческая морфология русского языка. М., 1957. С. 367.

一方で、問題点としては、まず直前の軟口蓋音が口蓋化しないのかという問題が挙げられる。さらに、Vermeer の指摘しているように、²⁹ なぜ本来呼格の用いられない非生物の名詞にも-e という単数主格語尾が用いられているのか、ということも問題点となる。

このうち、前者の問題については、前述のとおり Vermeer の説明を利用することができる。しかしながら後者の問題については、説明することは可能であるものの、実証することが難しい。

その難しさは、古ノヴゴロド方言における活動体の概念の発達についての議論の困難さにある。すなわち、非生物の名詞には呼格は用いられないということ を考慮すると、この問題に対する説明方法は、呼格語尾を主格語尾として用いる現象がまず生物を表す o-stem 男性名詞において起こり、それから、主格へと拡張された-e という語尾を非生物の名詞や分詞などの呼格の用いられることの少ないものへと拡張されていったのだとする他にない。しかしながら、そもそも古ノヴゴロド方言において生物を表す名詞と非生物の名詞の文法的な区別、すなわち活動体名詞の概念が本当に存在していたのかという点に、疑問の余地が存在するのである。

古ロシア語一般における活動体の概念の発達について論じた Хабургаев や Борковский らの研究においては、³⁰ 活動体名詞・不活動体名詞という区分が発達しているかどうかとすることを判断するために、本来の生格語尾が対格語尾として使用されているかどうかという基準が用いられている。しかしながら、古ノヴゴロド方言の全年代を通じて、単数対格に義務的に-a をとる活動体名詞の例は限られており、³¹ その中でも A 期の文献における単数対格語尾-a の用例は一例のみと、非常に少ない。³² さらに、生格語尾が対格語尾として用いるという現象の背後には主格語尾と対格語尾を区別するという動機が存在すると考えられているため、³³ とりわけ主格と対格語尾がもとより別形であるとする印欧祖語由来説の立場をとった場合には、この基準を用いることは不可能であるように思われる。Зализняк はこの事実を踏まえて、古ノヴゴロド方言における男性単数対格語尾は本来-ъのみであり、したがって活動体名詞と不活動体名詞の区別は存在しなかったのだと述べている。³⁴

²⁹ Vermeer, “The mysterious North Russian,” p. 272.

³⁰ Хабургаев. Очерки исторической морфологии (前注 10 参照). С. 168-176; Борковский В.И., Кузнецов П.С. Историческая грамматика русского языка. 3-е изд. М., 2006. С. 208-209.

³¹ Крысько В.Б. Категория одушевленности в древненовгородском диалекте // Славяноведение. 1993. № 3. С. 69-79.

³² その一例は«на Ивана»というものである: Янин В.Л., Зализняк А.А., Гиппиус А.А. Новгородские грамоты на бересте (из раскопок 1997–2000 гг.). М., 2004. С. 92-93.

³³ Борковский и др. Историческая грамматика. С. 208.

³⁴ Зализняк. Древненовгородский диалект. С. 107.

しかしながら、代名詞の対格には本来の生格語尾が用いられることもあるため (e.g. *васъ*) ,³⁵ 少なくとも生物を表す名詞と生物以外のものを表す名詞に全く区別が存在しないと断言することは、さらなる考察の可能性を切り捨てることであるように思われる。

例えば、呼格由来説を検討する際に問題となる -e と -ь という二種類の単数語尾それ自体が、対格語尾のかわりに活動体名詞と不活動体名詞の区別を行っているという可能性は存在しないのだろうか。前述のとおり、これは先行研究では文献の性質の違いによって使い分けられるのだとされてきた。³⁶ しかし、印欧祖語由来説ではなく呼格由来説を前提として、本来の o-stem 男性名詞の単数主格と対格の語尾がどちらも -ь であったと仮定した場合には、古ノヴゴロド方言においても主格語尾と対格語尾を区別するという動機それ自体は存在していたと考えるのが妥当であるように思われる。

そこで以下では、活動体の概念がもし存在するならば活動体と不活動体の区別は類型論的な有生性階層に従うと仮定したうえで、³⁷ -e と -ь という二種類の男性名詞単数主格語尾のどちらが現れるかということと名詞の有生性との間に、何らかの関係がないかということを経験的に検証する。

統計処理にあたって、古ノヴゴロド方言の硬変化の男性名詞を、(1) 個人名と親族名詞、(2) 役職などの人間を表す名詞、(3) 神・奴隷および人間以外の動物、(4) 非生物、という四種類に分類した。³⁸ そして、これらの中で -e と -ь の分布に偏りが存在するかどうかを、有意水準 5% の独立性の χ^2 検定で検証した。³⁹ もし二種類の語尾の分布に有意な偏りが存在し、かつその中で (1), (2), (3) が同じように扱われていることが示されたならば、古ノヴゴロド方言において活動体の概念が発達していたということを示唆する証拠となる。Зализняк のデータに基づき、語彙素数ではなく用例数をベースとした。⁴⁰ 例えば、語彙素 Иванько に対しては、Иваноке と Иванко という単数主格形が一例ずつ確認されているため、「活動体・主格語尾 e (~ь) ⁴¹」および「活動体・主格語尾 ь (~o)」に 1 ずつ追加するということになる。

³⁵ Там же. С. 130-131.

³⁶ Древнерусская грамматика XII-XIII вв (前注 10 参照) . С. 172; Зализняк. Древненовгородский диалект. С. 100.

³⁷ ここでは Whaley の有生性階層を参考にした: Lindsay Whaley, *An introduction to linguistic typology* (Thousand Oaks, CA: Sage, 1997), pp. 172-179.

³⁸ 神 (богъ, 単数主格語尾は -e が 0 例, -ь が 12 例) は非人間かつ非生物であることから、ここでは人間以外の生物と同じ類にまとめた。

³⁹ ただし、語義が不明であるものや、-я という語尾をもつものは計算から除外した。

⁴⁰ Зализняк. Древненовгородский диалект. С. 710-829.

⁴¹ 括弧内は正書法上のゆれ: Там же. С. 23-25.

表1：硬変化男性名詞単数主格の実際的用例数

	主格語尾 e (~ь)	主格語尾 ь (~о)	計
個人名・親族	65	32	97
その他の人間	7	8	15
神・奴隷・動物	0	17	17
非生物	23	151	174
計	95	208	303

表2：硬変化男性名詞単数主格の理論度数

	主格語尾 ь~e	主格語尾 ь~о	計
個人名・親族	30.413	66.587	97
その他の人間	4.703	10.297	15
神・奴隷・動物	5.330	11.670	17
非生物	54.554	119.446	174
計	95	208	303

上記のデータをもとに χ^2 値の計算を行なった結果、 $\chi^2(3) = 93.287$ であった。 $\chi^2_{0.05}(3) = 7.81473$ であるから、 $\chi^2(3) > \chi^2_{0.05}(3)$ が成立し、有意水準 5% で、名詞が活動体であるかどうかということ、主格語尾が -e と -ь のどちらをとるかということの独立性の仮説は棄却された。

このことから、個人名と親族名称が有意に -e をとりやすく、神・奴隷および人間以外の動物と、非生物が有意に -ь をとりやすいということが示された。すなわち、古ノヴゴロド方言においては個人名と非生物の間には文法的な区別が存在するということが示唆されたものの、個人名以外の奴隷などの名詞が -e をとりやすいという事実は存在しなかった。したがって、このデータからは現代スラヴ語のような活動体の概念が発達していたとは考えにくいということがわかった。

この結果はどのように解釈できるだろうか。ひとつの解釈可能性は、単数主格語尾として -e が現れる頻度がほぼ有生性階層において上にあるものから下にあるものへと段階的に減少していっているのであるとみなすものである。このように解釈した場合には、これ段階的な頻度の変化は、本来の単数呼格語尾 -e を主格として用いる現象の対象が人名からほかの名詞へと拡張されていった痕跡であり、したがって呼格由来説を支持するものであると解釈することができるだろう。

しかしながら、現代スラヴ語のような活動体の概念が発達していないことと、神・奴隷・動物を表す名詞に-e という単数主格語尾が一切現れないことを重視し、このデータは呼格由来説を支持するものではないと解釈することも可能である。その場合には、この統計処理によって示された語尾の選択の傾向の有意な偏りは、文献の種類の違いなどの、有生性階層とは別の要因がはたらいたものであると考えることになる。

以上のように複数の解釈可能性があることを考慮すると、この統計処理の結果からは、語尾の選択の傾向に有意な偏りがあるということは示されているものの、これが呼格由来説を支持する証拠と解釈できるかという問題については議論の余地があるといえる。つまり、この結果は呼格由来説を否定するものではないものの、強く支持するものでもないといえる。したがって、呼格由来説はこれを明確に否定する根拠もなければ、これを強く支持する根拠もない説であると結論付けられる。

4. まとめと今後の展望

本稿では古ノヴゴロド方言における単数主格語尾-e の由来についての複数の説明方法を比較し、考察した。

説明方法としてとりうる方針は、現状では大きく分けて印欧祖語由来説と呼格由来説の二種類である。印欧祖語由来説には、説明の経済性という利点が存在する。しかし、文献上に確実な根拠を求めることができず、古ノヴゴロド方言の系統上の位置づけも困難となる。一方で呼格由来説は、系統上の問題は発生しないものの、呼格語尾が主格に拡張されていったという仮説を支持する強い根拠が存在しない。

このように、それぞれの説明方法には、利点と問題点が同時に存在している。しかしながら、どの利点も問題点も決定的なものではない。したがって、それぞれの利点と問題点をどのように評価するかという点次第で容易に研究者間の見解の相違が生じてしまうこととなる。このことが本稿で取り扱った問題の解決を困難にしている大きな理由の一つとなっているように思われる。

本稿では、利点の大小の差よりも問題点の大小の差のほうが大きいと判断されたため、問題点の大小を基準とすることとする。以下ではそれに基づいて、それぞれの説のうちのどれが相対的に最も優れている、あるいは将来性があるかということ判断する。

印欧祖語由来説の大きな問題点は、古ノヴゴロド方言の分化の年代を第一次口蓋化の起こった年代よりも前としなければならないことから、古ノヴゴロド方言のもつ東スラヴ語的要素を全て言語接触の影響としなければならないなど、スラヴ語の系統樹の根本的な見直しが必要とされることであった。その一方で、呼格由来説の問題点は、呼格語尾が主格語尾に拡張されるという現象の動機を、十分な説得力をもって説明することができな

いことであつた。

この両者のうちで、問題点が相対的に大きいのはどちらであろうか。前述したように、呼格由来説の問題点は、明確に仮説に反するものではない。それに対して、Olanderの説における*-os > -oを示唆する語の存在や Vermeerの説における類推モデルの問題点は、現状ではその仮説に明確に反するものであるように思われる。それに加えて、印欧祖語由来説には古ノヴゴロド方言の系統上の位置づけが困難になるという問題点も存在する。このことから本稿では、両者の説明方法のうちでは印欧祖語由来説よりも呼格由来説を現状ではより将来性のあるものであるとして支持する。

今後の課題は、呼格由来説については、呼格語尾の拡張の動機や過程を強く示唆する根拠が存在しないかどうか、文献上のデータを分析していくことである。また、印欧祖語由来説を支持する場合には、古ノヴゴロド方言を含めたスラヴ語の新しい系統樹の作成が課題となるだろう。どちらの説を支持したとしても、系統樹をどのように描くか、あるいはどのような類推モデルが用いられているのかということに留意することは不可欠である。

付録：古ノヴゴロド方言における硬変化男性名詞の主格語尾一覧⁴²

Зализняк の語彙集 ⁴³ の見出し	実際の語形	Зализняк の語彙集の 見出し	実際の語形
Бездѣдъ	Бездѣде	Жирославъ	Жирославъ
берковескъ (重量単位)	брьковъске, берковске	замокъ 「錠前」	замъке
богъ 「神」	бого, богъ	Иванко	Иваноке, Иванко
боранъ 「牡羊」	боранъ	Иванъ	Иване
Борисъ	Борисе	Игнатъ	Игнато
бортникъ 「養蜂場」	бортико	игумень 「修道院長」	игумене, игумень
братъ 「兄弟」	брате, братъ	Иевъ	Иеве
Бервно	Бървьнь	Иосифъ	Иосифъ
брусъ 「角材」	брусе	Исакъ	Исакъ, Исако
Василько	Василке, Василко	кожюхъ 「外套」	кожюхе
Васько	Васке	Кснятинь	Коснятино
Вечерко	Вѣцѣркѣ	Максимъ	Максима

⁴² ou などの異体字は全てそれと置換可能な現代ロシア語の文字に変換した。また, ж は ю, л は я にそれぞれ変換した。

⁴³ 注 40 参照。

внукъ 「孫」	вонуке, внуке	моръ 「疫病」	мъре
Волось	Волосе	мѣхъ 「毛皮」	мехе, мѣхъ
вытоль (語義不明)	вытоле	намъ 「利息」	наме, намъ, намо
вѣдунъ 「魔法使い」	ведуно	Олександръ	Олександре, Олександръ
Гахонъ	Гахоне	Павель	[П]авле, Павело
глекъ 「水差し」	гълько	Петръ	Петре, Петръ
градъ 「街」	градъ	поклонъ 「挨拶」	поклонъ, поклоно, покло, пклонъ, пклоно, поклно, поконо
Гречинъ	Грицьнъ	поль 「半分」	поль, поло, пълъ, пло, поль
Грихно	Грихънѣ	попъ 「司祭」	попе, попъ
Давыдъ	Давыдъ	послухъ 「証人」	послухъ, послухо
дворъ 「敷地」	дворъ, дворо, двъръ	приказъ 「命令」	приказъ, приказо
дворянинъ 「貴族」	дворянине	рабъ 「奴隸」	рабъ, рабо
Демидъ	Демидъ	Сидоръ	Сидоре
Дмитръ	Домитре, Демитре, Дѣмитръ	скоть 「金錢」	скоть
Доманъ	Домане	Смень	Смене
Домаславъ	Домаславе	сорочекъ 「40(単位)」	сърочъке, сроцеке
дубъ 「櫨」	дубо	Степанъ	Стъпане, Стопане, Сътъпанъ, Степане, Стопаня
дьякъ 「書記」	дѣякъ	сынъ 「息子」	сынъ, сыно, сино(!)
Еванъ	Еване, [Е]вано	Федоръ	Федоре, Федоръ, [Ф]едоро
Есифъ	Есифе, Есифъ	Филипъ	Филипе, Фипе
Жадко	Жядъке	хлѣбъ 「パン」	хлѣбе, хлебе,

			хльбѣ, хлѣбѣ
животѣ 「腹」	животѣ	человѣкъ 「人間」	человѣко, человѣкъ
Жизнобудѣ	Жизнобуде	Яковѣ	Яковѣ, Яковѣ, Яковѣ
Жирко	Жирѣке, Жироке		

On the origin of the masculine nominative singular ending in -e in Old Novgorod Dialect

OYAMA Yusuke

This paper discusses the origin of the o-stem nominative singular ending -e of Old Novgorod Dialect, which is one of the most debated matters in the field of Russian historical linguistics. Here we argue which of the three hypotheses formulated till this day, is the most persuasive.

The first hypothesis is that it directly derives from Proto-Indo-European (PIE) *-os, via some intermediate stages like *-ǝ. This has an advantage where it can explain the ending -e simply as a regular reflex of PIE *-os and therefore needs no analogical explanation, while there seems to be some counterexamples.

The second hypothesis is that it comes from the io-stem ending *-e (< PIE *-ios), which replaced the hypothetical o-stem ending *-o, as a way of eliminating the situation that the nominative singular endings of o-stem masculine and o-stem neuter are the same (i.e. *-o). This explanation seems to be problematic, as there seems to be no morphological motivation to differentiate two same endings in Common Slavic.

Moving on, the last hypothesis is that it comes from the o-stem vocative singular ending -e by some kind of analogy. This explanation seems less persuasive, as it lacks strong evidences to explain why the vocative ending had to be chosen to replace the original nominative ending. At the same time, however, it does not have a reliable counterexample that works against it.

In conclusion, none of the three hypotheses are sufficiently persuasive, though the last one seems to be the least contradictory as it does not have any reliable counterexamples.